

泉のくらし

瑞穂の国、この表現は「古事記」「日本書記」が書かれて以来、日本国の美称として使われていた。その意味するところは、神意により水が豊富で、稲が豊かに実り、その結果栄える国を象徴している。今でこそ日本国民は水に不自由していないが、日本で初めて近代水道（配管内を圧力をかけて殺菌された水を送る）が開発されたのは明治20（1887）年、横浜水道であり、つい130年前のことである。農耕稲作民族の日本人は水の恵みに感謝し、また水の恐ろしさを噛みしめてきた長い歴史を有している。それがゆえに、日本は世界でも水に関する諺が多い国である。

【中国から学んだ諺・名言】

・上善若水

「老子」の八章に書かれたもので、水には学ぶに足る三つの特徴がある。第一に、柔軟である。どんなに器を変えてもそれなりに形を変え、逆らうことがない。第二に、水は低いところ、低いところに流れてゆく。しかもその間に多くの植物や生態系に分け隔てなく自分（水）を与えながら、低いところを求めて移動している。低いところに身を置くのは人間、誰でも嫌がるが、水は最も低いところに留まり、しかも謙虚である。第三に、ものすごい能力を秘めているが、自分の能力や地位を誇ろうともしない。このように水は「柔軟、謙虚、秘めたエネルギー」を有している。老子は、人間もそれら自身につけることができれば、理想の生

き方に近づけるのだという。

・人莫鑑於流水、而鑑於止水

「莊子」の徳充符篇に書かれたもので、人間も静止した水のように、静かな澄み切った心境であれば、いついかなる事態になっても、慌てることなく、誤りのない判断を下すことができるのだという教えである。

上杉謙信は合戦の天才と言え、ほど戦いの腕を持っていたが、「明鏡止水」の諺を多用している。謙信の名言集には「人の上に立つ人間の一言は、深き思慮をもってなすべきだ。軽率なことは言ってはならぬ。」と心のあり方を述べている。いわく、

- 心に物なき時は心広く体泰なり
- 心に邪見なき時は人を育てる
- 心に自慢なき時は人の善を知る

【水に関する諺・名言】

日常生活や文章でよく使われる「水の諺表現」である。意味については割愛する。

・自然を表す表現

山紫水明／行雲流水／明鏡止水

・状態や行動、心がけを示す

背水の陣／水も漏らさぬ／我田引水

／上手の手から水が漏る／蛙の面に

水／河童の川流れ／血は水よりも濃

い／覆水盆に返らず／年寄りの冷や

水／焼け石に水／立て板に水／水に

流す／水が合わない／水入り／水掛

け論／水の泡／水を得た魚のように

／魚心あれば、水心／魚の目に水見

えず／水魚の交わり／水清ければ魚

棲まず

われわれの身のまわりにある諺は、人生を賢く生きる知恵であらう。

水に流せない ⑩ 吉村和就 水の話

日本の水の話は 世界の中でも多い

日本語には水にまつわる諺がたくさんあります。これすなわち、水への畏敬の念が反映された結果。どんな諺があるのか、見てみましょう。

よしむら かずなり・グローバルウォータージャパン代表、
国連環境アドバイザー。日本を代表する水の専門家の一人。
『水ビジネス——110兆円水市場の攻防』（角川書店）など著書多数。

イラストレーション／白井裕子

